

PHD LETTER

74

2000・3

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のために使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- 古参職員フジノに聞け 3P
- 10歳になりました その2 ～ソディ通信 28～ 4P
- 山と人の関係を知る2日間 8P
- 完成しました。～子ども向けレター～ 9P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ 202
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867
e-mail: phd@po.hyogo-iic.ne.jp
定価：100円



竹で編みあげたカゴを火であぶり、
ササクレを燃やして仕上げ
「要るものは買うより作る」が基本
これが村流

タイ メーホンソン県 メフ村 撮影：FUJINO.T

東西南北 問題解決 取組日記

11月〇日

日頃、農業研修生の指導をお願いしている兵庫県市島町の橋本慎司さんから依頼を受けて、国際有機農業運動連盟(IFOAM)のアジア会議に参加する。ところはフィリピン、マニラから南に60kmのカビテ州タガイタイ。



農業・化学肥料に頼らずにすむ稲の品種の実験農場
(マカヨカヨ)

3日間の会議に先立ち、カウンターパートであるSAFRUDIのプロジェクト地のひとつを、ルソン島中部パンガシナン州マカヨカヨ村に訪ねた。SAFRUDIから派遣されているワーカーのロミーさんの案内で村をまわり村人と話す。ここでは今、村人の組織化と稲の伝統品種の試験栽培に重点がおかれている。自分たちの

追悼

新年早々、悲しい知らせが入った。当協会の前総主事であった草地賢一さんが1月2日の夕方亡くなった。12月27日に熱が出たといって寝込まれ、ついで入院、さらに転院した先の病院で容体が悪化してのことだった。病名は腸炎からの敗血症。4日に神戸東部教会で多くの参列者を得て、葬儀が行われた。

84年11月から98年3月までPHD協会です仕事をし、その4月からは兵庫県立姫路工業大学環境人間学部の教授であった。また95年の震災後からは阪神大震災地元NGO救援連絡会議の代表としても活躍しておられ

取り組みによって村を変えていこうというねらいが村人にまだまだ十分には理解されておらず、問題や課題に対して施しをうけることを待っている姿勢をまず変えなければとロミーさんは話してくれた。

マニラに戻って、会議に参加するためネグロスから呼んだ研修生ドミーさん(89年度)、ネストールさん(90年度)と合流、ラグナ州の82年度研修生パニサレスさん、マノリトさんの家を訪ねた後、会議場へ向かった。パニサレスさんは病気療養中だったが、マノリトさんは元気でやっていた。

会議はアジア各国とヨーロッパからの参加者でざっと300人。日本からは私のほかに有機農業の生産者、流通にかかわる人が9人参加していた。

中身は全体会と有機農業の技術、流通、社会環境に関わるいくつもの分科会があり、そのうちのひとつが「Farmer-to-Farmer Training」という題で、PHD協会が行っている農業者同士による研修について話をさせてもらった。これにはドミーさんにも、トレーニングを受けた立場で話してもらった。限られた時間ではあったが何人もの人が話の後さらに詳しいことを尋ねてきた。

ドミーさん、ネストールさんはいろいろな分科会に加わり、発言も積極的にしていた。フィリピン国内のいろいろな農業関連の活動を知ることとあわせ、いいフォローアップに

た。

岩村昇医師が提唱したモノ、カネより人づくりを通しての協力、原因解決型の協力、草の根の人々とともにといったPHDの基本と情熱的、押しが強い、多弁、親分肌といった草地さんの個性とが絡んだいくつもの光景が思い出される。

PHD協会が研修生の人材育成を活動の柱にしていることは今更言うまでもないが、もう一方で退いた職員の人たちも業務を通じてPHD協会です仕事をし、その後の新しい分野での活躍に生かしてくれているように思う。草地さんの震災以降の活動に

なったと思う。PHDはモノ、カネを直接投入することは控えてきているが、今回のような形のフォローはこれからも積極的に考えたい。

2月×日

兵庫県社町にある県立教育研修所で15年経験の高校教員対象の講座でお話。PHDの経験からの「世界の見方」をスライドを使って説明し、いくつかの参加型手法による作業を通じて学んでいただいた。今年タイからカレンの女性を招いていることに話が及んだ際に、「タイの病院を占拠した人たちをPHDは応援しているのか」*との質問があって、びっくり。タイ、ビルマ国境にまたがる地域には200万とも300万ともいわれるカレンの人々が住んでいる。そこには、いろんな考え方の人々、グループがあり、そのうちのひとつが事件を起こしたわけだ。日頃なじみのない人には「カレン」と言われればひとくくり、一部のことを全体のことととらえてしまうことがある。しかし、その誤解から「武装グループを支援するPHD」というイメージにつながるならば、これは困ったことだ。すぐ地域の状況を説明したが、正しい知識、認識を得ること、伝えることの難しさを感じた。

総主事代行 藤野達也

*1/24タイのラチャブリ県の国立病院がビルマの反政府武装グループに占拠された事件。

も皆さんのご支援によるPHDでの10年余りの経験が生きていたことは間違いない。まだまだやりたいことは多くあったとは思いますが、こんな逝き方も、らしいといえはそんな気もした。

海外にでかけるのが好きだった草地さん、天国は海外とは言わないだろうけど、そちらでゆっくり休んで下さい。

藤野達也
(1月12日記)

1月19日ご遺族より「葬儀の際に頂いたものを故人の思いをくんで、関わったところに」とご寄附をいただきました。心より感謝いたします。

【特別連載】“古参職員フジノに聞け!”

第1回

— あのとときやPHDも私も若かった



一昨年でいよいよ20周年を迎えるPHD協会。世の中が大きく変化したこの20年という月日の中で、PHDも試行錯誤しながらその歩みを重ねてきました。そこで、PHD職員歴18年の藤野さんに、PHDの過去、現在、未来を熱く語ってもらいます。—

編集部(以下編):PHD誕生前夜の日本はどんな感じやったんですか。

フジノ(以下フ):二度の石油ショックも乗り越えて、日本の経済力は強くなり、70年代半ばごろからは海外旅行も珍しくなくなり、日本の人の外への関心も欧米一辺倒からアジアへと広がっていった時期だったと思う。市民運動としては、国内では「反戦・反核一、労働一、公害一、消費者一」といったものがあつたけど、今みたいな一般的な広がりではなかったと思う。

編:「NGO」や「国際協力」といった言葉に対する認識はどうでしたか。

フ:70年代初めからポツポツと民間でも国際協力の活動があつたけど、より一般的になったのは、1979年のインドシナ難民問題をマスコミが大々的に取り上げてからだと思う。80年前後にいくつかのNGOが出来て、少し盛り上がってきた、という感じ。

PHDの提唱者岩村先生がネパールから帰国したのは、そんな頃だったんです。

編:当時の岩村先生の知名度や活動について。

フ:実は、私は知らなかったんですけど、もうすでに全国区でいわゆる偉人の一人だったと思う。「私が国際協力をやる」なんてことは誰も考えてもみない60年代に、ネパールに行って医療活動にあつただけですごいわけですよ。

さらに、自分の経験を踏まえてモノ・カネでなく人づくりの重要性を説いたのは非常に進んでいた。モノ・カネでも十分国際協力の訴えになっていた当時では、早すぎたのかもしれない。でも、お金だけでなくあなたの時間や才能などの10パーセントをさ

げましょうという呼びかけが新鮮でした。

編:そしてPHD誕生へ。

フ:PHDの設立の前に岩村先生はアジア保健研修所(保健医療分野の人材トレーニングをワーカーレベルで行っている)の立ち上げにも関わっていた。その上で、さらに草の根の人々レベルへの直接的な人づくりができれば、という思いからできたのがPHDだったと思う。そして、1981年6月にロータリークラブの賞をいただいたことをきっかけにPHDは誕生。岩村先生が講演して支持を広め、一方で今井先生(現理事長)が組織を作っていく役割でした。

編:PHDとのなれそめは。

フ:81年12月にPHD最初のスタディツアーというか第1期研修生候補者の村を下見するためにネパールとフィリピンへ行く旅があつたんです。ちょうどその頃に、ボランティアとして事務所にに関わりはじめて、「一緒に行きましょう」と誘われ、研修生を引き受けてくれる農家のお父さんたちと出かけたのが深みにはまるきっかけになりました。

編:いつ職員になりはつたんですか。

フ:1982年の4月です。さっきの旅の帰りの飛行機の中で岩村先生に口説かれて、その3ヵ月後に会社を辞めた。5月には海外出張に出て、帰国後日射病(?)で倒れて…とバタバタした出だしでした。

編:当時の研修の様子はどうでしたか。

フ:それぞれの研修先を見つけるのは、岩村先生が講演会で知り合った人の名刺が私のところにきて、その方に連絡をとって、お訪ねして、お願いするということからはじまりました。

はじめのはじめは、岩村先生の話聞いて盛り上がった篠山の皆さんが修復したかやぶきの建物「たんば農文塾」での合宿からスタート。日本の

生活に慣れることがねらいの1ヵ月、私はメシ炊きに追われてました。

編:事務所では、ボランティアはどう関わってはつたんですか。

フ:私が外を飛び回っている間の事務所は、主婦の方々によるボランティアにおまかせ。電話の対応、領収書を切ったりという仕事をお願いしてました。

2年目、3年目を迎えていく中で、若い人や学生もボランティアに参加してくれるようになったし、有機農業関係の人たちとのネットワークもできたり、会報を作ったり、Tシャツや絵ハガキを作ったり…。

編:はじめのころと今の活動の重点の違いはありますか。

フ:活動の主役は研修生と日本の一般の人たちで、事務局はその橋渡しをするという点では、今も昔も変わってないでしょう。でも研修に関しては、技術偏重だったように思う。

編:具体的にいうと。

フ:要は、事務局が岩村先生のメッセージについていけてなかった。岩村先生は最初から、モノ・カネの援助だけではない人づくりの大切さ、一時的な同情にとどまらず原因を解決する取り組みであること、外に依存せず自らの手で取り組むこと、さらに世界の人々と共に生きるために日本の中で日常生活を見直すことを言っておられたわけです。でも、技術研修だけで精一杯のところもあつたし、職員の側に国際協力について十分な知識、理解がなかったと思う。

そして、1980年代後半になって草の根の人々中心の人づくりを掲げたPHDの本来の意味に私たちがようやく気づいた、と言えると思います。それは研修先、内容の変化といったことにつながって行って、生協や農協に行くようになってたり、日本の社会問題についても学ぶ機会を設けるようになってたりと、今の活動に近づいてきたと思います。

編:ふーん、ほんまに最初は試行錯誤やったんですねー。

一話はまだまだ続きます。次回はPHDの現状について。えうご期待!—



第16回スタディツアー

コンピューターの2000年問題を避けるため、例年の日程より二日早めの大晦日に、ツアーのプログラムが終了した。参加者はタイツアー始まって以来の少人数だったが、帰った研修生に加えて次期研修生に出会うこと、布のグループとの会合、布の買い付けなど予定のプログラムを行なうことができた。

明けて2000年、事務所で現在研修中のポーディさん、ベリポーさんも含めて新しい布を見た。サイズ、デザイン、色、縫製の具合など、良いところ悪いところ、村でも伝えてきたことを含めて話し合い、ソディの扱う商品としてのタグ付け、値段付けの作業をすすめた。



染めの実演（シードンチャイ村にて）

10年間でやってきたこと、わがってきたこと

当然のことなのかもしれないが、物事は少しずつしか進まないということ。いや、少しずつ変えていくことができる、継続することが力になっていく、ということがだんだんにわかってきた。

初めは、プリチャーさん（北タイ初の研修生、85年ムシキー/ノンジェットノイ村から。96年メラノイに移住）と日本語での手紙のやりとりをしていたが、93年頃からは彼だけでなくグループのほかの人にもわかるように、タイ語の手紙を加えるようにした。

こちらが主体とならないように、村のグループを我々の下請け工場に

10歳になりました。

～その2～

はしたくない、村の考えを尊重しようとやり始めた。とはいえ、彼女たちが作るものをすべて引き取るわけにもいかず、私たちがさばくことのできる、言いかえれば買う人の気持ちにかなった色合い、寸法、柄を伝えることになった。さらにやりとりが確実になるようにと、94年には村とソディとでサイズと値段の表をお互いに同じものを持つようにもした。

同じ「注文する」ということでも、やりとりをした後の注文では一方的な注文より気持ちが通じていると感じられた。

仕入れの時には髪の毛や染料のカスが入っていること、土の汚れなど、自家用なら構わないが、売するためには不都合なところを指摘することはたびたびあった。これはこれからも続けていくことだろう。

草木染めということ、手織りということ

今まで私たちは、布のしおりにもあるように「草木染手織布」とうたってきたが、この織物は彼女たちにとっては生活の一部であり、さらにカレンの伝統的な織り模様であり、母から娘へと伝えられてきた民族文化を表すものである。

現在の日本には、多くの物に囲まれた便利な生活があるが、その中で手しごとで一枚一枚作られる布のようなものの、画一的な工業製品とはちがう良さは、どう評価されているのだろうか。

日本の多くの伝統は廃れ、保存しなければならぬものになってしまっている現在、伝統を大切に私たちが偉そうに言えるものではない。しかし、そういう道を通ってきた私たちに、今彼女たちの持っているものが大切にされなくなっていくことがあれば、それは残念なことにも思える。

研修生を中心として村人による村づくりを進めるとき、地域にあるものを活用して、ということもPHDは考えている——自然の草木を染料

として染色することは、この考えに当てはまる。その一方では「草木染め」ということが、現代の日本人たちにとっては、別の意味合いでも受ける要素を持っていた。

村人の手による草木染めは、自然の風合い、手づくりの良さを持っている。ただ、今の村での染め方ではまだ改善の余地がある。色落ちはある程度避けられず、頻りに洗濯するにはあまり向かないことも判ってきた。

10歳になったソディ、新しい歩みはどこへ踏み出すのか

99年度は、村のグループからの推薦で研修生がやって来て、その布を製品にする研修を進めてきた。また、4月からはポーディさんに続くブンシーさんをメーサリアンのグループから迎える。今いるふたりの研修生がそれぞれの村に帰り、グループの人たちに勉強してきた経験を伝え、グループとしてどのように展開していくのか——。



ポーディさんとベリポーさんの作品

12月のツアー時には、日本でのふたりの研修の様子を伝え、帰国後の活動に期待していることを話し合ってきた。具体的には、試作したカバンなどをまず送ってもらい、それに対してこちらから助言をして、売れるものにしていくやりとりが今まで以上に重要となる。そして売れるものができるようお手伝いすることが、この地域への研修のフォローアップのひとつとなる。

これまでの10年は、はっきりとした方向性がなかったが、これからはもう少しそれをしっかりさせていくことになる。村のグループがもっと成長したら日本での私たちソディ

の役割（現在は支援の割合が勝っている）はいらないと言われるかもしれない。その時にはソディは、今は別の形、対等な友だちとしてのおつきあいができるようになるのかもしれない。

遠くにはそれを望みながら、これからの活動がすすめられることと思う。

（小松みち）

前号の呼びかけに応じていただいたメッセージを

ソディ10周年おめでとうございます。「タイ、カレンの手織りの布」が新聞で紹介され、私は早速PHDでその布を目のあたりにしました。その美しい色、やさしい色、そしてその暖かい手織りの布の感触は今も忘れることが出来ません。思わず「これ作っている人に会いたい」「つれて行って」の言葉が口をついて出ました。そしてその冬PHDのスタディツアーの一員として北タイ、カレンの村を訪ねました。そして、糸を染め布を織る女性たちとの交流の場に参加することが出来ました。夜遅くまでランプの明りの下で語り合いました。そして草や木の皮で糸を染め布を織っていく一つ一つの手仕事によって出来るこの布のファンになりました。

私はバッグにベストに、テーブルセンターにと使っています。私の心の中にはいつも布を通して製作者であるタイ北部の山の中のカレンの人々とその風景が生きています。

私たちのこの草の根の交流がタイの民族文化を大切にしながら、子ども達の就学援助や生活を豊かにすることにつながるものであることを願っています。

大谷恵子

（90年度ツアー参加者・短大教員）

ソディは援助するグループでなく連帯するグループだと私は考えています。また、布を通して南北問題を考え行動していくこともグループの大切な目標でしょう。

秋山範子（中学校教員）



ソディはフェアトレードなのか

ソディの活動が始まって10年が経つ間に、日本でフェアトレードという言葉が少しずつ知られるようになってきた。フェアトレードとは、簡単に説明するならば、第三世界の草の根の人々が作った商品を公正な値段で取り引きする草の根レベルの貿易のこと。ここに、雇用機会の提供とか文化的背景の尊重、環境への配慮、作る人と買う人の顔の見える貿易であることなどという注釈がついてくる。

ソディの活動もフェアトレードの要素をたくさん持っている。村のグループのおばちゃん達との顔の見える関係。伝統を大切にしていくことを伝えている部分。草木染めを通して環境の大切さを知ってほしいとも

思っていること。

国を超えた貿易には売り手と買い手の力関係から、売り手/生産者に不利な状況がよくみられるが、それを改めようというのがフェアトレードである。ソディと村のグループの関係では、作り手が希望する値段で買っている点はかなっている。

しかし、一方でこれが彼女たちがタイ国内で売ろうとする時の過保護につながってしまうのでは意味がない。日本での研修や村とのやりとりをする中で品質やデザインを向上させ、彼女たちの希望する値段で国内市場などで売っていきける実力がつくように応援していきたい。

物事はゆっくりとしか進まない。けれどポーディさん、ベリポーさんを含む村のグループもソディも根気強くゆっくりと進んでいければいいと思っている。

（田中康代）

▶ 私たちも応援団

—— 評議員を訪ねて

今回はPHD協会設立以来、多大なご協力をいただいている、神戸YMCAの山口総主事をお訪ねしました。

神戸YMCAはPHD協会が最初に事務局を置かせていただくなど、初期からご支援いただいています。山口総主事はまず古い新聞記事の切り抜きを出されて「この新聞を持っていますか」と尋ねられました。それは1981年6月1日付けの記事で、岩村先生がロータリー国際理解賞を受賞し、これを機に新しい平和運動＝PHD運動を神戸から起こそうと訴えている記事でした。

その記事を見せながらPHDの活動について、「モノやお金による支援だけではなく、地域の自立のためにがんばろうという草の根の人材を育てている点が良い。その中でも、特に研修生の帰国後に彼らをお世話した人達が現地を訪ねるフォローアップは素晴らしい」とおっしゃいました。研修生については、YMCAでの日本語研修にふれ、彼らはとても学習意欲が高く、そこに村を代表しているという責任感を感じるとのこと

した。

YMCAとPHDに共通する最も大切なことは、その活動を通してミッション（使命・それぞれの団体が最も大切にしている目標）を伝え、活動に関わった人達はその体験を経て生き方を変えていくことです。その一例としてYMCAが行なっているタイやフィリピンでのワークキャンプに参加した青少年がいかにか変わったかというお話をされた時、私達は、そこにPHDの研修生と交わることで変わっていく日本の人達の姿を重ねて聞きました。

最後に、ミッションを伝えるには多くの人々に分かりやすく言い換えることの工夫があると同時に、そのためのプログラムは時代のニーズに対応しながらも、その少し先に行く先行性と、他との違いは何かという個性性が求められる、と示唆に富んだお話を聞かせていただきました。

社会の状況が刻々と変化していく中、このお話を今後のPHD協会の運営に生かしていきたいと思っています。

17期生

個別研修

エディーさん

フィリピン

田中利男氏、奥出雲葡萄園、日登牧場（島根県木次町）～牛尾武博氏（兵庫県市川町）～一時帰国～中野宗嗣氏（春日町）

ダスウィルさん

インドネシア

金谷昌高氏、上垣幸一氏（兵庫県大屋町）～ふえろう村塾（小野市）～株式会社夢のさと（夢前町）～渋谷富喜男氏（神戸市）

ベリポーさん

タイ

高橋武子氏（兵庫県三木市）～鴻谷美江子氏～越田恵子氏／森嶋信太郎氏（神戸市）

ポーディさん

タイ

高橋武子氏（兵庫県三木市）～鴻谷美江子氏（神戸市）～下吉富久子氏（篠山市）～NB COMPANY（明石市）～色々～ぐらする一つ（神戸市）～芦田安紀子氏（芦屋市）

共通研修

井上由美江氏～上田弓子氏～柴山晴美氏（神戸市）～淡路島モンキーセンター（兵庫県洲本市）～山口勝弘氏（南淡町）～本野一郎氏（神戸市）～釜ヶ崎キリスト教協会（大阪市）～明石協同歯科（明石市）～保田茂氏（神戸市）



虫害の原因は？（明石協同歯科にて）

東日本研修旅行

美浜原子力発電所（福井県美浜市）～光照寺（敦賀市）～美浜北小学校～美浜東小学校（美浜町）～近江八幡YMCA（近江八幡市）～インターアクトクラブ年次大会／鈴鹿西ロータリークラブ（鈴鹿市）～海善寺／アユス東海（愛知県津島市）～トヨタ自動車労働組合（豊田市）～PHD鎌倉交流会（鎌倉市）～関東学院中学校、捜真教会、捜真幼稚園（横浜市）～松戸教会（千葉県松戸市）～ロータリー米山記念奨学会～全日本自動車産業労働組合総連合会（東京都）～勝楽寺／アユス＝仏教国際協力ネットワーク（町田市）～山梨英和学園～甲府教会（甲府市）～松本教会（松本市）～塩尻めぐみ幼稚園（塩

研修生レポート

尻市）～高永楓氏（長野市）～国際ソロプチミスト高山～PHDひだ友の会（高山市）～岡崎国際短期大学（岡崎市）～国際ソロプチミストかかみの（岐阜県各務原市）

西日本研修旅行

宮崎西ロータリークラブ（宮崎市）～鹿児島有機農業生産組合（鹿児島市）～高尾野小学校、だるま保育園（出水郡）～水俣病センター相思社、浜元二徳氏（水俣市）～熊本YMCA（熊本市）～下郷農業協同組合（大分県耶馬溪町）～犬養光博氏（福岡県金田町）～庄内町生活体験学校（庄内町）～古野隆夫氏（桂川町）～アジアを考える会・北九州、祝町小学校、北九州YMCA（北九州市）～下関丸山教会、梅光女学院短期大学（下関市）～マツダ労働組合、広島YMCA、アジアに学ぶ会、久保浦寛人氏、立正佼成会広島教会、広島廿日市ロータリークラブ（広島市）～いきいきセンター瑞穂、高原小学校（島根県瑞穂町）～三良坂小学校（広島県三良坂町）～日影館高校（吉舎町）、庄原市保健センター、国際ソロプチミスト庄原（庄原市）～食の杜木次（島根県木次町）～後楽館高校、南北ネットワーク岡山／岡山YMCA、備南ロータリークラブ（岡山市）

2月に入り、それぞれの現場での最後の研修に出かけました。これまでエディーさん、ダスウィルさんは農業を中心に研修をしてきました。

エディーさんは、1年間の研修の中で、より強く有機農業の大切さを感じ、日本で長年実践している人に出会うことで実際にできるということを強く確信したようです。日本で学んだ堆肥作り、野菜作りをデモンストレーションファームを作って、皆に見てもらいたい、と話しています。

ダスウィルさんは、後半は、竹を使った「箕」の作り方、また、ダスウィルさんの村で多く作っている黒砂糖で作る「かりんとう」などの研修もしました。ダスウィルさんは、「もの」を作ることで、村の人の関心を集めたいと考えているようです。タベ村の生活にも今後ますます現金が必要になります。

そのような時に、現金を求め、食べるための農業が売るための農業に急激に変化し、結果的にたくさん抱える村が多くあります。農産物をそのままでも、自分たちの手で加工し製

品にして販売することができていれば、そのような急激な変化にさらされずに済むのかもしれませんが。

ベリポーさんとポーディさんは、保健衛生、栄養について学びましたが、最後にそれを村の女性に伝えるにはどうしたらいいのか、実際にタイで健康教育にかかわった経験のある看護婦さんから学びました。栄養や衛生のことを話だけで伝えるのは難しいので絵をかいたり、一緒にゲームをしながら楽しく伝えたらよい、と実際にゲームの形式で食品を3つのグループに分類してみました。（写真）



どの食べ物は、どのグループ？

終わった後、「今日の勉強は遊んでいるみたいで楽しかった。こういう方法だったら、お母さんだけでなく、子どもたちも聞いてくれるかもしれない。自分でも色々お話やゲームを考えてみよう」と話していました。

また、2人は出身地域で織っている布の加工にも力を入れて学んできました。

帰国後は、村の女性に伝え、さらなる現金収入につなげることを目標としています。帰国後の活動を考えると、ミシンをどうやって手に入れるのか、ポーディさんは女性のグループのメンバーとはほとんど面識が無いこと、グループの中心である30代、40代の村の女性が町に出ることはめったにないこと等、難しいことがたくさんあります。それでも、「これだったら簡単だし、ミシンがなくても作れるからいいかな」などと2人で話をしながらカバン、ポーチ、人形などを次々と作りました。

「販売」を目的とした手芸の研修を初めて実施して、研修生も職員も色々なことを考えました。村の生活にも現金

がますます必要になることを考えるとこのような研修は、北タイだけでなく、他の地域からもリクエストが増えると思います。PHDの「モノ・カネ」は送らないで村の人自身の取り組みを支援するという基本姿勢を大切にしながら、帰ってからの研修生の取り組みを応援していきたいと思っています。

現場での研修は2月上旬で終了し、研修生は1年間の研修のまとめと水俣、筑豊、釜ヶ崎等を訪れ、日本の社会から学んでいます。研修生の村も自給自足ではなく、町との関係なしには生活できないところが増えてきています。水俣での学びを通して研修生は、今の村の変化のよろさを感じたようです。ポーディさんは、「村に水道がなかった時は、みんなが川の水を汚さないように考えていました。でも、今、村には山から水を引いています。それは、とても便利でお母さんの仕事は減ったけれど、川を大切にしくなくなり、ゴミを捨てるようになって汚れてしまいました」と話しています。ベリポーさんは、水俣であったことを聞いてる間、頭からタイのことが離れなかった、と話しています。ベリポーさんの村からバスで約4時間のところにあるチェンマイには、大きな工場もありその周辺は空気も水も汚れているそうです。

研修生にとって、経済発展の過程で日本で起こった様々な問題は、もう「遠い未来に自分の国や村で起こるかもしれないこと」ではなくなってきています。近代化の大きな波に飲み込まれかけると、村の人にできることはますます少なくなってくるのかもしれませんが、あきらめないで、自分たちにもできることがあるだろうから村の人と一緒に考えよう、と話していました。

第9回日韓農民交流

- イヒョンスク 李賢淑（稲作、野菜、牛）
- チョンミョンスクン 全明順（稲作、野菜、加工）
- オモンスクク 吳明淑（稲作、畑、牛）
- オミジン 吳美延（稲作、野菜）

ソニンエ 宋寅愛（通訳）

来日～淡路島モンキーセンター～夢広場（兵庫県洲本市）～山口勝弘氏（南淡町）～橋本慎司氏～荒木食品株式会社～一色作郎氏（市島町）～中野宗嗣氏～春日町国際交流協会（春日町）～食品公害を追放し安全な食べ物を求める会／信長たか子氏（宝塚市）～食と農を考える交流会／保田茂氏、神戸学生青年センター、日本基督教団兵庫教区社会部委員会～グランメール／西馬きむ子氏（神戸市）～浅田大輔氏（篠山市）～松尾博子氏（京都府綾部町）～難日



西馬きむ子さんから話を聞く

韓国（忠清南道洪城郡）の新規就農者を含む女性の生産者5名を迎え研修、交流を行いました。メンバーは、日本で訪ねた農家で女性が生き生きと活躍に発言し、「男性の手伝い」でなく農業に加わっていることに驚き、刺激を受けました。特に西馬きむ子さんからは、農業は男性が中心というイメージが強いが、女性が中心になって担えることも多くあるとの話を聞いたことが印象に残りました。農業は食べるものを作ることです。一方、家庭で家族の食事を作るのも、子育てをするのも女性が中心になることが多いです。そこで女性の視点から食べ物の安全、子どもの暮らす環境、家族の健康を考え、農業をし、社会に訴えることができるという考えで、西馬さんは近隣の女性生産者とグループを作っています。全さんは「女性でも今ある問題を少しずつ解決し、あせらずにやれば、色々な役割がこなせると勇気付けられた」と話していました。

見学、交流にご協力下さった皆様へ心から感謝いたします。ありがとうございました。

国内研修生

貴重な「生」体験

納堂邦弘

10月4日——研修初日のことは今でも昨日のこのように覚えています。何事においてもあまり物おじしない性格なのですが、さすがにその日ばかりは緊張したのか、帰るとき「お疲れ様でした」と言うところで、口をついて出た言葉は「お世話になりました」。もうやめるのかと多に失笑を買ったものでした。

この5ヵ月を振り返ってみて、特に印象に残っていることの一つは、「子ども向けレター」プロジェクトです。様々なバックグラウンドを持ったボランティアの方々と力を合わせ、長い時間をかけて一つのものを作り上げていく難しさ、おもしろさを知ることができました。

もう一つは、やはり水俣、筑豊を訪れた西日本研修旅行。毎日の生活を送るなかで、一人の日本人として忘れてはいけないことを再認識させられました。そして、過去を振り返り、かつ現状を様々な視点から見つめ直すことなしに前へ進むことはとてもあやうい、と痛感しました。

「国内研修生って何やってんの」とよく人に聞かれます。私の場合に限って言えば、「体験学習」でしょうか。例えば、日々の事務作業やボランティアの方々との共同作業を通してPHD、ひいてはNGOの運営に触れ、海外からの研修生との交流を通じて彼らの出身地の様子を知り、西日本研修旅行では日本の社会問題を学ぶ…。頭でっかちになりがちだった私にとって、「生」の声や現場に触れることができたこの5ヵ月間は大変貴重な財産になりました。

帰国してからも、より大切な海外研修生たちと同じように、私もこの経験をうまく今後につなげていかなくては、と考えているところです。



アフダールさん

(31歳、男性)

インドネシア、西スマトラ州タベ村
研修内容：農業、協同組合
ダスウィルさん(99年度)に続く、
タベ村から2人目の研修生です。



リンダ・アニスさん

(21歳、女性)

パプアニューギニア、モロベ州アンゴリ村
研修内容：保健衛生、協同組合
ハリエオさん(97年度)の隣村の
出身。帰国後は、ハリエオさんとの協
力を期待しています。

はじめまして!!4月初めに来日します 18期研修生



ノバドン・カヨムドッさん

(24歳、男性)

タイ、カラシン県クッタカイ村
研修内容：農業、協同組合
久しぶりに東北から。ワラヤさん
(88年度)、サウエーさん(91年度)
の活動が活発になるよう、この地域
から数人の研修生を招く予定です。



プンシー・プチャレットカワンさん

(19歳、女性)

タイ、メーホンソン県ソートンチャイ村
研修内容：保健衛生、手芸、協同組合
ポーディさん(99年度)と同様に
この地域にある女性の手織り布グ
ループから推薦されました。最年少。

山と人の関係を知る二日間

昨年の11月14~15日にかけて、篠山市
大山地区で林業体験合宿「枝打」を行ないま
した。

今回は研修生のエディーさんとダスウィ
ルさんもそろっての参加でした。作業だけ
でなく夜には地元大山地区のみなさんと
の交流会も行ない、総勢40人以上の方が参
加してくださいました。今回の交流会は特
にエディーさんのフィリピンでの活動に焦
点をあてました。

エディーさんの村とその周囲の山
の様子、エディーさんが SAFRUDI (送
り出し団体)と一緒に彼の住む地域
ガバルドンで取り組んできた、森林
再生の取り組みについて、スライド
を交えて説明しました。

エディーさんが子どもの頃は、ト
レーラー1台に丸太一本しか積めな
いような大きな木がたくさん山に生
えていたそうです。しかし、1980年
代までに商業目的の森林伐採が進み
ました。切られた木のほとんどは日
本に輸出されたと言われていました。
その結果、現在は山に木がほとんど
ありません。

フィリピンの木材輸出統計による
と、日本への輸出量は1970年代に急
増し、一転して1980年頃には急激に
減少して、今では、非常に少なくな
っています。なぜなら切り出す木がな
くなってしまったからで、その後は

マレーシアやインドネシア、パプア・
ニューギニアでも森林伐採が問題に
なっています。

ガバルドンでは山から木がなく
なったために、大雨が降る度に山の
表土は流出し、川は増水、氾濫を繰り返
返しています。このような目に見え
る被害だけでなく、木がなくなった
ことで村人と森林のこれまでの関係
が壊れてしまいました。



はげ山になった上に度々山火事が発生します
(ガバルドンにて)

これをなんとかしようと、エディー
さん達は、森林を回復させようと、村
人に呼びかけて山に植林をしています。
しかし、植林した木が十分に保水
力を持つまで成長するには時間がか
かる上、一旦はげ山になってしま
うと、コゴンという草が山肌一面を覆
います。コゴンは木の生育を阻み、ま
た度々発生する山火事の時には、も

のすごい速度で延焼し、植林した木
まで焼いてしまいます。森林をはじ
めとした自然環境を失うのは簡単で
すが、元通りにするのはその何倍も
の労力と時間が必要なことを、改め
て感じます。

このような話を聞いて、「フィリピ
ンの森と日本の森に違いはあれど、
『山を守る』ことの大切さは同じで
す」と、大山振興会のみなさん。私
たちは日本の「山を守る」ことを考え
ねばならないだけでなく、森林資源の
「消費者」として、世界の森林につ
いても考えなければなりません。

例えば、日本で消費される木材も
主な用途によって生産地が違います。
日本の木は建築材、アジア・南太平洋
地域の木は合板材、北米大陸の木は
建築材や製紙原料などとして利用さ
れることが多いのです。自分達の生
活と森林資源がどういった関係にあ
るのかが見えないと、「なんとなく」
では何をすれば森林や環境を守るこ
とができるのか分かりにくいのが現
状です。

こうしたプログラムを通じて、こ
れからも私達と世界、アジア・南太
平洋地域の関係を見えやすいものにし
ていきたいと思ひます。

(伊藤公男)

完成しました。

「私たちの住む世界のために活動する
私たちの仲間と心を一加藤に感想を伺
うました。」

Peace (平和) **Health** (健康) **Development** (発展)

なにかよく すぐ、やがて、いきいきと ~アジアの人の生活(フィリピン)~

フィリピンの子供たち
は家の外でよく遊びます。
特にバスケットボールが大
好きです。他には、Pikoと
いう日本の「ケンケンパ」に
似た遊びも人気があります。
私の子どもたちは洗濯、
血洗、水牛の世話、家の周
りのそうじなど、毎日よく
家の手伝いをします。

私はキリスト教を信じています。毎週日曜
日には、家の近くにある教会へお祈りをしに
行きます。フィリピンでは88%の人がキリ
スト教を信じています。
みなさんはどうですか。

私の国は
ここです。
旅行や探検
の準備中
です。

フィリピンには日本と同
じ島国です。7,000以上の民
島があり、たくさんの民
族が住んでいて、それぞ
れの言葉を使っています。
日本には有識者の強
強をするために来ました。
フィリピンの村へ帰った
ら、日本で勉強したこと
を村の人たちにも教えた
い。そして、みんなで
力を合わせて、農業や
化学肥料をできるだけ使
わない農業を広めてい
たいと考えています。

フィリピンで主に作られているものは何
ですか? 答えは1つ(うい、あ、あ、あ)
で、フィリピンは1つ(うい、あ、あ、あ)
でしょうか? 答えは1つ(うい、あ、あ、あ)
①リンゴ ②バナナ ③パイナップル
④マンゴ ⑤メロン

フィリピンには、毎年約20人からい
年に2~3回、家族や友達20人からい
年に2~3回、家族や友達20人からい
年に2~3回、家族や友達20人からい
年に2~3回、家族や友達20人からい

フィリピンには、毎年約20人からい
年に2~3回、家族や友達20人からい
年に2~3回、家族や友達20人からい
年に2~3回、家族や友達20人からい
年に2~3回、家族や友達20人からい

PHD (Peace, Health, Development)

ピー・エイチ・ディー

PHDは、アジア・南太平洋の人々といっしょに平和(Peace)で
健康(Health)な生活をおくるためにがんばる人を育てています
(Human Development)。そして、みんながいっしょに生きる
社会をめざしているんだよ。

「国際協力」は決して難しいものでもありません。
だから、みんなにも参加してほしいと思います。
例えば、次のものを集めてPHDに送って下さ
い。エディーさんたちが研修生の勉強を支えるために
使われます!!

1. プリペイドカード
テレホンカード、オレンジカード、
Jスルカードなど。
使っていないものはもちろん大きな歓迎!!

2. ハガキ(年賀状、かもめ一紙なども)
書き損じしたものや
使っていない消印のないもの
おねがい!!

PHD協会の活動は、アジアや南太平洋地域のの人たちと
日本の人々をつなぐお手伝いをしています。

「国際協力」は決して難しいものでもありません。
だから、みんなにも参加してほしいと思います。
例えば、次のものを集めてPHDに送って下さ
い。エディーさんたちが研修生の勉強を支えるために
使われます!!

PHD協会の活動は、アジアや南太平洋地域のの人たちと
日本の人々をつなぐお手伝いをしています。

財団法人PHD協会
〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3-202
Tel:078-351-4892 Fax:078-351-4867
E-mail: phd@bno.hyogo-ic.ne.jp

2000/3 4000

前号でお知らせしていた子ども向けレターができました。また、これを使って子ども会をす
るのか、先生向けのしおり作りも検討中です。次年度はこれまでに以上に学校にも積極的に出
かけていきたいと考えています。
学校の先生に向けた講演/交流会のご案内も用意していますのでお気軽にお尋ね下さい。

「まだ、純真な、吸収力のある子どもたちにも国際的な感覚、連帯の姿勢を培
う試みに大賛成です。
世界の貧しい人たちに私たちが何かしてあげなければ、という気持ちをもた
せてしまわないことが大切だと思います。」

PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

1999年	11月	96件	1,498,765円
	12月	861件	7,482,151円
2000年	1月	234件	3,021,863円
		1191件	12,002,779円

今年度も前号73号で、年末募金のお願いをいたしました。以上の通り皆様より多くの会費とご寄附を頂戴いたしました。皆様のご協力で心よりお礼申し上げますとともに今後も一層のご支援をよろしく願います。

□メールアドレスをお知らせ下さい

皆さんがどのくらいEメールを利用されているのか知りたいと思っています。今後の情報発信の方法を検討したいと思っていますのでご協力をお願いします。

メールアドレスをお持ちの方は、下記のPHD協会のアドレスまでご一報下さい。

phd@po.hyogo-iic.ne.jp

〇月×日のPHD協会

職員 藤野 2月は海外行きはないけれど各地でお話、理事会・評議員会、採用試験等々目白押し。さらには原稿も加わって、トドメに七千字の依頼。間に合うか。

職員 谷 役立つ経験、楽しい出会い、ホームシック、研修の迷い、留守家族への心配等々。一年間の研修には山あり、谷あり。皆さん本当にお疲れさん。

職員 伊藤 秋の枝打ちでサンテレビ、2月のワン・ワールド・フェスティバルでFM.COCOLOにと、今年度は電波メディアにご縁あり。見た？聞いた？

職員 山西 評議員団体から協力をいただくには、こちらとの接点をうまく見つけることが必要。それを求めてお話、おでかけ。相手さんにも役立つPHDを。

職員 小松 小、中、高校にでかけ、お話の出前。2年先の総合学習という名の授業内容の変化はウチの経験が生きるチャンスと売りこみに力が入り、汗にじむ。

職員 田中 「田中と言えば雨」の定説が冬には「田中と言えば雪」に変化。2年前の再現となり、今回も島根、鳥取で豪雪を呼びこみ、研修生とチェーン巻き。
(歩くのが速い順)

スタディツアーが決まりました!!

(日程、費用は予定です)

タイ (東北部)	7月22日～29日	16万円
ネパール	8月6日～13日	21万円
パプア・ニューギニア	8月20日～30日	26万円
インドネシア	9月14日～19日	21万円
タイ (北部)	12月23日～1月2日	19万円

*会員は、割引あり。詳しくはお問合わせ下さい。

編集メンバー：井上由美江、岩脇章能、尾下葉子、土本丘、納堂邦弘、野添智子、藤木寿乃

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載していません。

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載していません。

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。